

P2-55-6 出生時に大量腹水が残存した先天性サイトメガロウイルス (CMV) 感染の救命例

筑波大

伊藤浩子, 八木洋也, 森 悠樹, 津曲綾子, 小宮春奈, 眞弓みゆき, 永井優子, 大原玲奈, 安部加奈子, 小島真奈, 濱田洋実, 佐藤豊実

先天性サイトメガロウイルス (CMV) 感染により出生前に腹水や肝腫大などの腹部所見があった場合の死亡率は 60% との報告もあり, 特に胎児腹水が出生時まで大量残存した先天性 CMV 感染児の生存例の報告はほとんどない。今回我々は妊娠 21 週で著明な腹水を認めた先天性 CMV 感染児に対し胎児治療を行い, 出生時まで大量腹水が残存したものの, 救命し得た症例を経験したので報告する。母体は 25 歳, 1 経産。妊娠 17 週まで児の異常は指摘されなかった。妊娠 21 週の健診で著明な胎児腹水が認められ, 当科紹介となった。腹水の他, 小頭症, 肝腫大を認めた。母体の血中 CMV-IgM 抗体: 7.25, IgG 抗体: 12.9 と陽性で, 腹水より CMV-DNA: 1,000 copy/ml を検出し, 先天性 CMV 感染が疑われた。倫理委員会の承認とインフォームド・コンセントを得て, 妊娠 23 週と 24 週に腹水穿刺後, CMV 抗体価の高い免疫グロブリンの腹腔内投与 (2.5g×2 回) を施行した。その後腹水の減少を認めなかったため, 週 1 回の胎児腹水穿刺 (妊娠 22~36 週: 平均 379 ml/回, 合計 15 回) を継続した。妊娠 37 週 1 日に前期破水, 足位のため緊急帝王切開となった。児は 2,843g の女児, Apgar score: 2/5 点 (1/5 分), 臍動脈 pH: 7.253 で, 大量腹水による著明な腹部膨満が認められた。ただちに人工呼吸管理が開始された。CMV-DNA が血液 (104 copy/μl), 尿 (2,480 copy/200μl) から検出されたものの, 腹水からは検出されなかった。日齢 3 よりガンシクロビルの投与を開始したところ, 一時胸水の貯留も認めたものの胸腹水とも徐々に改善した。日齢 20 に抜管し, 以後再挿管なく経過している。胎児期からの積極的治療が先天性 CMV 感染児の予後を改善する可能性があると考えられた。

P2-55-7 出生年度別の風疹抗体価に関する調査: ワクチン非接種世代の抽出

奈良県立医大

長安実加, 成瀬勝彦, 中村雅子, 松原 翔, 佐々木義和, 杉本澄美玲, 常見泰平, 佐道俊幸, 小林 浩

【目的】風疹の流行により 2013 年に 32 例もの先天性風疹症候群 (CRS) が報告され, 注意喚起が行われている。1977 年から女子中学生に対する定期接種が始まり, 法改正により 1995 年より生後 12~90 か月未満の男女への定期接種が開始された。その過渡期において昭和 54 (1979) 年~62 (1987) 年に出生した女性のワクチン接種率の低さが指摘されている。当院は県下唯一の総合周産期センターであるが, 風疹抗体の保有状況について妊婦の出生年度別に抗体保有状況を統計解析した。【方法】当院で 2012 年 1 月から 2014 年 12 月に妊娠に関連して入院した女性のうち, 診療録で当院または他院で測定した風疹抗体検査 (HI 法) の調査できた 2402 名を対象とし, 後方視的検討を行った。抗体価 8 倍未満を抗体なし, 8 倍を低抗体価とした。【成績】女性の出生年度は昭和 38 (1963) 年~平成 10 (1998) 年であり, 測定時点で抗体のない女性は 204 名 (8.4%), 低抗体価の女性は 117 名 (4.8%) であった。8 倍以下の女性は昭和 44 年, 50~52 年, 56~60 年, 昭和 62 年~平成 9 年度生まれで 10% を超えた他, 昭和 60 年, 62 年, 平成元年~平成 3 年, 平成 5 年~9 年度生まれで 20% を超えた。またその内, 抗体のない女性 (予防接種を受けなかったと推察される) は昭和 62 年度生まれ以降で多く, 特に平成元年度生まれでは 24.4% と高い抗体非保有率であった。【結論】風疹ワクチン定期接種過渡期とその後生まれた世代でワクチン非接種者が多いと推察され, 以前我々が 2013 年に行った調査と同様の結果であったことから, 年度の特異性を証明した。今後更なる CRS の発生が危惧され, 抗体陰性妊婦への産後のワクチン接種を強く推奨するなどの対策が必要である。

P2-55-8 横浜市風疹対策事業による補助を利用した当院の風疹予防接種の普及への取り組み

昭和大藤が丘病院

松浦 玲, 西井彰悟, 村元 勤, 山下有加, 竹中 慎, 濱田尚子, 中山 健, 横川 香, 市原三義, 佐々木康, 小川公一

【目的】日本における風疹は, 成人で風疹の抗体を持たない世代があり, 周期的に流行し問題となっている。風疹はワクチンの接種により根絶可能な感染症であり, 抜本的な取り組みが必要である。この度, 平成 27 年 4 月 1 日より開始された横浜市風しん対策事業を機会に, 当院で分娩した褥婦のうち, 風疹抗体価が 16 倍以下の褥婦全例に, 分娩後の入院期間中に風疹ワクチンの接種を行うことを推奨した。風疹ワクチン接種の普及モデルとなることを目指した。【方法】当院での取り組みを評価し, 風疹ワクチンの接種状況を分析し, その結果について考察した。内容は全て当院倫理委員会での審査を経て行った。【成績】平成 27 年 4 月 1 日から平成 27 年 8 月 15 日までに当院で分娩した褥婦総数 281 例のうち, 風疹抗体価が 16 倍以下の症例が 100 例 (35.6%) で, そのうち 98 例 (98%) に風疹ワクチンを投与した。当院には横浜市在住でない該当者が 25 例おり, これらの褥婦は横浜市風しん対策事業の対象とならないため, 自費で行うことを推奨した。接種の同意が得られなかった 2 例は横浜市在住であり「次に妊娠する予定がない」や「夫が開業医で, そちらで摂取した方が安い」の意見があった。【結論】横浜市風しん対策事業は, 対象が厳しく限定されておらず, 利用しやすいものであった。妊娠初期検査で風疹抗体価が 16 倍以下であった妊婦が 100 例 (35.6%) と多数であった。妊娠初期検査で風疹抗体価が 16 倍以下であった妊婦全例に, 風疹ワクチン接種推奨の説明を行い, 産後の入院中に風疹ワクチンの接種をほとんどの症例で行うことが出来た。今回の方法は風疹抗体保持率を上昇させる方法としてとても有効であると考えられた。